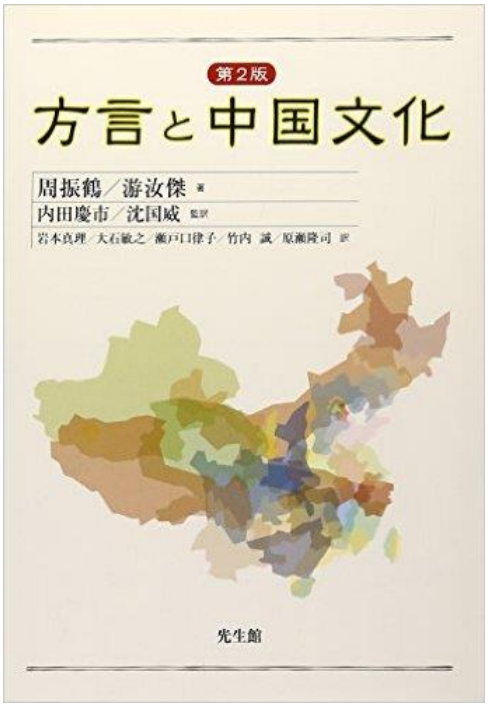

『方言と中国文化』2015 年 10 月発行、光生館（東京）

本書は、周振鶴、游汝傑両氏による『方言与中国文化』（第２版）2006 年、上海人民出版社の翻訳である。

周振鶴氏は現在、復旦大学中国歴史地理研究所の教授であり、専門は歴史地理学である。游汝傑氏は、長年にわたり復旦大学中文系の教授をつとめられた言語学者で、専門は中国方言学である。

原著の初版は、1986 年 10 月に上海人民出版社から出版された。今から 30 年も前に公刊されたものである。初版発行後、1996 年に一度改訂がなされたが、改訂は初版本の誤植・誤字などの若干の訂正にとどまり、全体の構成と基本的内容は旧版と変わっていない。そのため著者も述べているように、この 30 年間になされた新しい研究成果は原著には盛り込めていないし、また中国語方言の方言区分についても、内容が古いままであるという欠点がある。

しかし、この著書の学界における画期的な研究成果は全く色あせてはいない。

方言研究に関しては、今日からさかのぼること 2 千年前の漢成帝（BC32-BC7）の時代、黄門侍郎の官職にあった揚雄は『輶軒使者絶代語釈別国方言』（略称、『方言』）を著し、当時の中国各地の口語語彙を採録し方言比較語彙集を作成して、漢代方言地理の様相を明らかにした。漢代方言の全貌は反映されてないが、中国語研究の貴重な資料となっている。

こうした資料が数多く存在する中で、これまで中国の言語学研究は、伝統的に経学の付属物としての「小学」にはじまり、音韻・訓詁・文字の 3 つの部門からなり、研究の範囲は書きことばに限られ、経学を解釈するためだけに目的があった。

こうした中国語研究の流れのなか、原著は、文化的要因によって引き起こされると考えられる、言語の分化・融合・交替というマクロ的な変化を考察すると同時に、同じく文化的要因に起因すると考えられる、言語・方言の中の音声の変化・語彙の変化・文法構造の変化というミクロ的な変化を考察する方法で、人の移動・移民、人文地理、歴史的方言地理、栽培植物、地名、芝居・小説、民俗、文化接触の各文化領域にわたって、上述した『方言』に代表される歴史的著書や各種方言調査報告あるいは著者自身によるフィールドワークを通じて、中国の言語・方言を通時的、共時的に解明した。

また、方言を中国文化史の研究と一体化するという画期的な研究方法を用いて、方言の形成と発展の文化的背景を明らかにした。

本書の出版にこぎつけるまでには、長い時間をついやしたし、また、多くの方々の懇切な

ご教示とご指導をいただいた。訳出にあたり、最も痛感したのは方言学が言語学以外の人文科学と関連付けることがいかに困難で、労力を要するものであるか、ということであった。